21世紀のライフスタイルを考える「神戸の事件を考える町内会」記録

記録　江崎忠見

会議日　7月27日（土）

5月27日に神戸の北須磨団地の多井畑小学校6年生の土師淳が殺害され、切り落とされた頭部が同じ団地内の市立友が丘中学校の正門前にさらされる事件が起きた。切り刻まれた顔の口の挟み込まれていた紙片には、こうあった。

「さあゲームのはじまりです。／愚鈍な警察諸君／僕を止めてみたまえ／僕は殺しが愉快でたまらない／人の死が見たくて見たくてしょうがない／汚い野菜共には死の制裁を／積年の大怨に流血の裁きを／学校殺死の酒鬼薔薇」

その一週間後、神戸新聞社に送り付けられた千三百字の「犯行声明文」が公表されるに及んで、事件は大袈裟でなく日本中の関心事となり、21世紀ライフとしても、この猟奇的な犯罪について、この犯罪の背後にある社会的な問題、学校の問題について子供たちの意見を聞くため、討論を行った。

〔Aさん〕

この事件について当然その学校の先生もショックを受けていることと思います。しかし、すぐにその学校が悪いとか、先生が悪いときめつけるのは早すぎると思います。（元教諭）

〔Bさん〕

戦前は歴史の重みを認識していて、学校とか先生に疑問を感じたことはございません。皇室の存在感・・・（以下省略）戦後の50年の歳月は殺伐として、危機管理がまったくなっていない。もっと子供に目をむけて、子供に責任を持たせなさい。今の日本の状態のまま、かん桶に入るのは心配です（75歳主婦）

〔Cさん〕

この事件を機に家族の絆がほんとに大事だなと思いました。登校拒否の子供も、学校でなく家族で救えるケースが多いのではと思います。（主婦）

〔Dさん〕

この事件は・特異な子供が起こした事件とみるか社会が生み出したものかだと思いますが、私としては、特異な子供が起こした事件とと考えたい。（会社員）

〔Eさん〕

日本の社会全体がうそつきばかりで、金もうけ主義がはびこっているが学校全体がぬるま湯につかった状態でタガがゆるんでいないか。（元会社員）

〔Fさん〕

私はこの事件に関して知る情報は新聞・テレビでしか知りえないが、絵を描くとかの感情のものも、点数で評価されるようなシステムのなかで、自分を表現する術が難しいと感じています。（高校生）

〔Gさん〕

フランスの教育システムと日本の教育システムの違いの中で、フランスは道徳は親の責任であることが社会のなかで認識されている事は大きいと思う。日本の場合は、道徳までも親の幻想として、学校がなんとかしてくれるという認識にたって、学校の責任問題を論じてはいないか。

その他、学校の内申書の問題等さまざまな討論を行いました。

【今回の討論を通じて感じたのは】

問題は学校・・生徒と教師の間にあるのか、それとも家庭にあるのか、地域コミュニティーか？心のケア、メンタルヘルス、道徳教育？様々に議論し、討論してもこれら社会論については、それぞれに専門的に分析するのは、市民活動の範疇では時間が不足するような気がした。教育をテーマとして議論することは決して無駄ではないし、今後も継続していくと思うが、一方で今回参加された方々も含め、一般の市民の方は、現代社会に現に生きていて、現状を少しでもよりよく変え、参加し能動的に活動したい筈である。

したがって、「神戸の事件」については，優れた理論と分析は専門家に委ねるとして、1市民としては、文部省や教育委員会が「心のケア」「命の教育」の大切さをとき、その一見正しそうに思える見解に対して、しっかりと問い返せるだけの見識をもつだけの討論は続けたいと思った。

「本当にそれが真の問題なのか」「何をしようと言うのですか」と家庭にも学校ににも地域にも問題がないわけではない。しかし，それらの問題を作っていて、現状の中で具体的に変えることのできるものはないのか。教育制度そのものではないのか、または家庭にも社会にも地域にも、厳然として影響を与えている大学受験制度そのものが問題の本質ではないのか？！

高校生がいみじくも言った情緒の問題を点数で評価されるとの発言は、その事を語彙が不足した中での遠慮した自己表現であったのかも知れない。

私たちが市民活動を通して子供たちにできる具体的な方法は、大学受験で決まるレッテル（それで就職が決まり、収入がきまり、ライフサイクルでさえ決まると信じている）を形成している教育制度（大学受験）の改革（廃止）こそが21世紀ライフスタイルのテーマなのかもしれない。